

# 「発見のノダ」<sup>1</sup>再考

名嶋義直

## 0. はじめに

本稿は(1)(2)のような周辺的であると考えられてきた、いわゆる「発見のノダ」を関連性理論の観点から考察し、「事態認識に対する話し手の解釈」を「ある命題態度で提示する」という他のノダと共通の意味・機能を持つと考えられることを説く。<sup>2</sup>

- (1) あ、雨が降ってるんだ。 (野田1997:79(91))  
(2) (なくしていたと思っていた傘を見つけたとき)  
    なんだ、こんなところにあったんだ。 (庵他2000:273(4))

## 1. 先行研究

### 1.1. 先行研究の記述

- (3) 山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。 (野田1997:67(23))  
(4) 僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。 (野田1997:67(25))  
(5) (それまでわからなかった機械の使い方がわかったとき)  
    なんだ、このボタンを押せばいいんだ。 (庵他2000:273(3))

野田(1997:80-87)は(1)のようなノダを「話し手が、それまで認識していなかった事態Qを発話時において把握したことを示す」ものであり「話し手がQを認識していなかった既定の事態として把握した」時に用いられるものであるとし、「対事的非関係づけの『のだ』」としている。そして(3)のような「対事的関係づけの『のだ』」、(4)のような「対人的関係づけの『のだ』」<sup>3</sup>と連続的關係にあると述べている。

庵他(2000:273-274)は(2)(5)のようなノダを「発見の用法」と呼び、関連づけを表すノダの一用法として位置づけ、「関連づけの存在を発見したことを表す」ものであると述べている。(5)で言えば、「それまで使い方がわからなかった機械の正しい使い方が、『このボタンを押す』ことであったということを発見したということ」を述べる」ことであり、ノダが表す「関連づけの発見」とは「先行文脈内で未解決だった問

題に対する解答を見つけたということだと言える」と述べている。

## 1.2. 先行研究の問題点

野田(1997:81)は、1.1で引用した考えに基づき、(1)では「気づく前からすでに『雨が降っている』という事態が存在していたと話し手が捉えていることが示される」が、(6)は「眼前の事態をそのまま述べている」と述べている。しかし、その分析では、(7)(8)のような例をうまく説明できないように思われる。

(6) あ、雨が降ってる。 (同:81(9))

(7) (窓を開け、初めて雨が降っていることを認めて)

あ、雨が降っていた／あ、雨が降っていたんだ。

(8) あ、雨が降っているんだ。でも、以前から降っていたとは思えない。

(7)の「降っていた」の「た」は、話し手が「当該事態の存在を発話時に認識した」ことを表しており、<sup>4</sup> その点で野田(1997)の言うノダと共通する機能を持つと言える。したがって、「たノダ」文は冗長な表現となり、「降っていた」と「降っているノダ」は同義・類義文となるはずであるが、そのようなことはない。また(8)のように、話し手の「既定と捉えている認識」は後続文で打ち消すことが可能である。これは事態が既定と捉えられていなくてもノダが使用できることを意味する。以上からノダが「話し手がある事態を既定と捉えていること」を表しているとは考えにくい。

庵他(2000:274)は「発見のノダ」を「関連づけの存在を発見したことを表す」と定義し、「関連づけの存在の発見」とは「先行文脈内で未解決だった問題に対する解答を見つけたということ」と述べている。この考えで(1)を分析しようとする、2つの問題点が生じる。<sup>5</sup> まず、「先行文脈内で未解決だった問題」が想定できない場合、その枠組みでは記述できない、という問題点である。「雨が降っているかどうか」を全く意に介せず何気なく窓を開けた状況では、話し手に解決されるべき「先行文脈内で未解決だった問題」が存在していたとは考えられないからである。

第2の問題点は「解答の発見」に関する問題点である。(1)の場合「取り巻く状況」は「雨が降っている状況」であり、「ある発話」は「雨が降っている」である。この場合「ある発話」は「取り巻く状況」そのものを言い表わしている。つまり、「事態認識」イコール「解答の発見」となる。(2)の場合も同様である。「傘を探していた」という状況での「事態認識」が「あった」という「事物の発見」であり、その「事物

の発見」が「先行文脈内で未解決だった問題」に対する「解答の発見」ということになる。つまり「事態認識」イコール「解答の発見」ということになる。したがって「解答の発見」を(1)の場合は「雨が降っている」という現象文で、(2)の場合は「あった」という「タのムード的用法」で表すことができるように思われる。とすると、非ノダ文では表されず、ノダ文でのみ表されるものは何かという疑問が生じる。

## 2. 分析

### 2.1. 関連性理論の観点からの分析

#### 2.1.1. 関連づけ

本稿では分析の枠組みとして、Sperber & Wilson(1995)を中心としたいわゆる関連性理論において提唱されているいくつかの知見を援用する。関連性理論はある特定の言語形式の記述を目的とするものではなく、人間の発話解釈システムの記述を究極的な目的とする広汎な理論体系である。このことは逆に言えば、この理論がある特定の言語形式の記述にも応用可能であることを意味する。本稿が依拠する所以である。

従来、ノダが関わる「関連づけ」とは状況 P とノダで提示する命題 Q とを直接結びつける、または、状況 P から命題 Q を推論するというものと考えられてきたが、そのように考えることの問題点は既に述べた通りである。しかし、関連性理論の考えを応用すれば、それらの問題点を解消させることができる。

#### (9) 本稿における「関連づけ」の定義

関連づけとは、ある状況を知覚することによって想定 P を形成し、その想定 P と話し手が持つ文脈 C<sup>6</sup> の組み合わせから「文脈含意」「強化」「却下」のいずれかの「文脈効果」<sup>7</sup>を持つ新しい想定 Q を導き出す推論過程である。

想定 P を形成することは、話し手の事態に対する認識を形成することである。この想定が（心的または言語的に）行われた時点で想定 P は一種の思考という性格を持つ。更に我々は、この想定 P を自身が持つ文脈情報と結びつけることによって新しい想定 Q を導き出すことができる。想定 Q は想定 P や文脈 C どちらか一方から導き出されるものではなく、P と C との組み合わせから導き出されるものである。

この考え方をを用いれば、ノダ文を、事態 P とノダで提示される Q との3者関係ではなく、任意の文脈 C を加えた3者関係でより精密に捉え直すことができる。

(10) (一人で泣いている子供を見て) きっと迷子になったんだ。

(庵他2000:270(4))

想定P (以下P) : 子供が一人で泣いているという事実の知覚

文脈C (以下C) : 子供が一人で泣いている場面に関する知識の一部

想定Q (以下Q) : この子供は迷子になったという解釈

PとQとが異なる言語形式で表現される場合は(10)のように説明することができる。問題となるのは(1)(2)(5)のように、PとQとが同一の言語形式で表現されうる(されている)場合である。その場合、関連づけの際にCを介さなくてもPからQが導き出せることになるし、そもそもQで言い表わされる解釈はPの段階で既に確定していることであり、新しい解釈を導き出していることにはならないからである。つまり、従来の先行研究のように、Pの表す事態とQの表す事態とを直接関連づけてノダ文を説明しようとする(11)のようによく説明できなくなってしまうということである。

(11) あ、雨が降ってるんだ。

(=(1))

P : 雨が降っているという事実の知覚

Q : ?? 雨が降っているという解釈

この問題を、野田(1997)は「非関係づけ」として捉え「認識していなかった既定の事態として把握したことを表す」という異なる意味・機能を設定することで、庵他(2000)は「解答の発見を表す」という考え方を採ることで回避しようとしている。しかし、それらの論考にも問題点があることは1.2で述べた。この問題はPとQとが、同一の言語形式で表示されても、各々異なる表示対象を言い表わしていると考えれば解決できる。このような考え方は一見「都合のいい」考え方のように思われるかもしれないが、次に述べる考え方によってその妥当性が理論的にも裏づけられるものである。

### 2.1.2. 描写的用法 (descriptive use) と解釈的用法 (interpretive use)

Wilson & Sperber(1988)は、全ての発話は話し手の思考の表示のため解釈的に用いられるとした上で(同:139)、発話には描写的用法 (descriptive use) と解釈的用法 (interpretive use) とがあると述べている。描写的用法とは「ある状況」を「描写する」用法であり、解釈的用法とは「他者に帰属するある思考や発話」を「解釈して表現する」用法である。<sup>4</sup>以下にその論考を確認する。

- (12) A: (太郎が歩いてくるのを見て) あ、太郎が来た。→描写的用法  
B: (Aの発話を聞いてCに) おい、太郎が来たって。→解釈的用法

(12)Aは「太郎が来た」という事態を描写している。一方、(12)Bは事態ではなく、Aの「太郎が来た」という発話に対するBの肯定的な解釈を言い表わしていると考えられる。Bは「太郎がやってくる場面」を見ずに、Aの発話を受け入れて判断しているだけである。したがって実際にやってきた人物が「太郎」である保証もない。

- (13) A: (Bに語用論の概説書を渡しながらか) 語用論は面白いよ。→描写的用法<sup>9)</sup>  
B: (Bは語用論に興味がない) うん、語用論は面白いね。→解釈的用法

(13)Aは「題目(語用論)」に対する「話し手の判断(面白い)」を肯定的な態度で提示しているものであり、判断文であるが、「話し手の判断をそのまま描写している」という点において「描写的用法」に属する。一方、(13)Bは「題目」に対する話し手の「判断」を提示しているものではない。つまり、Bの発話はAの発話を否定的・懐疑的に解釈し、言い表わしたものと見なすことができる。三尾(1948)の分類で言えば、(12)A・Bは共に現象文であり、(13)A・Bは共に判断文であるが、文構造は同一でも各々異なる用法で用いられ、異なる対象を表示していることになる。

ある発話・思考を別の解釈で言い表わすということは、解釈される「元の思考」と「解釈」との間に類似性(resemblance)が存在することになる。この類似性は程度性を持つため、究極の類似性の一方は同一性となる。このように考えると、先に問題提起した(1)(2)(5)のような「事態P」と「ノダが提示するQ」とが同一の言語形式で表現されうる場合を説明できる。非ノダ文は「事態認識」、ノダ文は「事態認識に対する話し手の解釈」という異なる性格の表示対象を提示すると考えれば、音形こそ同一であれ、Pとノダが提示するQとは同一ではないと考えることができるからである。

ただし、同一の音形をとるのであれば、非ノダ文を用いれば事足りる。あえてノダという形式を用いる必要があるのかという疑問が残る。その疑問を解くのが「命題態度」である。解釈的用法は、判断文では言表事態に関与しないとされる<sup>10)</sup>「話し手の命題態度」を内在的に表現しうると考えられる。これは解釈的用法が「思考の解釈」であることを考えれば納得がいく。解釈とはある固有の観点や立場から事態認識・思考・発話を捉え直すことだからである。ノダ文は「話し手の命題態度」を内包して成立していると考えられ、以下のように「話し手の命題態度」が言語化されている文も

多い。現象文では表現できない「話し手の命題態度」をノダ文が内在させていると考えれば、非ノダ文ではなくノダ文には存在する固有の特徴を記述することができる。

(14) にんじんってこんなに甘いんだ。ぼくもびっくり！ (あいち生協広告)

(15) 自分の理想とする人は必ずいるんだなあ。 (株式会社ツヴァイ広告)

## 2.2. 「発見のノダ」への応用

これらの考え方は「発見のノダ」における考察にも有効であると考えられる。

(16) 相手もhotmailじゃないと駄目なんだ。 (実話)

P: 自分が送ったメールが文字化けしていたという事実の知覚

C: 文字化けについての知識と相手のメールソフトに関する知識の一部

Q: 相手も自分と同じhotmailじゃないと駄目だという解釈

(16)は「メールが文字化けしていた」という聞き手の報告に対する返答である。先行研究の表現で言えば「原因を発見したこと」を表していることになるが、聞き手は「相手もhotmailじゃないと駄目だ」はもちろん、原因に関することは一切言っていない。ノダで提示されているのはあくまで話し手の、聞き手の発話に対する「因果関係という観点」からの解釈であると考えられる。また、先掲(2)の「こんな」という連体詞の使用は話し手が「傘があった場所」を「意外な場所」として評価的に捉えていることを示している。<sup>11</sup> つまり、「発見のノダ」においてノダが提示するのは「関連づけのノダ」と同様、「ある命題態度を伴った話し手の解釈」であると考えられる。

興味深いことに、「発見のノダ」は、他のノダ文であれば後接することができる「らしい・ようだ・にちがいない・そうだ」といった事態の蓋然性を表す助動詞に後接することができない。これは「発見のノダ」用法において、ノダがこれらの助動詞と同じ蓋然性判断というレベルに関与して機能していることを意味する。<sup>12</sup>

(17)a 相手もhotmailじゃないと駄目なんだ。 / 駄目だ。

b # 相手もhotmailじゃないと駄目らしいんだ。 / 駄目らしい。

c # 相手もhotmailじゃないと駄目なようなんだ。 / 駄目なようだ。

d # 相手もhotmailじゃないと駄目にちがいないんだ。 / 駄目にちがいない。

e # 相手もhotmailじゃないと駄目そうなんだ。 / 駄目そうだ。

また、待遇的考慮をすべき聞き手を想定した場合、提示情報に対する同意要求・確認の機能を持つ終助詞「ね」が必須となるという特徴がある。ノダが同意要求・確認を行っているということは提示する解釈が完全には確定していないことを意味する。

- (18) a (先輩が発表するのを知って、独話で) 秋の学会で発表するんだ。  
b (発表の準備に忙しい同級生を見て) 秋の学会で発表するんだ。  
c # (発表の準備に忙しい先輩を見て) 秋の学会で発表するんです。  
d (発表の準備に忙しい先輩を見て) 秋の学会で発表するんですね。(実話)

以上から、「発見のノダ」は「ある命題態度を伴った解釈」を、客体化した話し手自らに対して同意要求・確認することによって確定させるという機能で用いられていると考えられる。言い換えれば、事態認識と文脈とを関連づけることによって新しく導き出された「ある命題態度(「評価」「驚嘆」「落胆」等)を伴う解釈」を、自らに「納得させる」という機能でノダが使用されていると考えることができる。

本稿では話し手の認識過程を大まかに(19)のような段階で捉える。

- (19) ①「状況知覚段階」：あ、財布がない。  
②「不確定解釈段階」：忘れたのか、落としたのか、取られたのか…。  
③「確定解釈段階」：忘れたり取られたのではない。落としたんだ。  
④「既定解釈段階」：(どうしたの?と問われて) 財布を落としたんだ。

(19)から明らかなように、②～④段階ではノダ及びその変異形が出現しうる。このことは、個々に機能する段階こそ異なるものの、基本的にはノダ及びその変異形が「事態認識に対する解釈」という共通のレベルにおいて機能することを証明していると言えよう。「発見のノダ」は③の段階で用いられるノダであり、ある事態認識をもとに関連づけを行い、導き出された帰結を「事態描写」ではなく「事態認識に対する解釈」として確定させる場合に用いられる。ここで注意したいのは、ノダが提示するQがこの段階で既定性を有することになる点である。つまり既定性とは解釈が確定することによって生じる特徴であると言える。いわゆる「説明のノダ」は④の段階で用いられるノダである。このノダは「話し手にとって既定の解釈」を提示することになる。この場合、ノダの使用は聞き手に「『話し手は財布を落とした』と解釈する」という解釈の方向を示し、その解釈を受け入れさせようとすることになると言える。

以上、本稿の観点に立てば、①「発見のノダ」を「関連づけ」の枠組みで扱える、②現象文と「発見のノダ」とが音形上類似する事象を合理的に説明できる、③「発見のノダ」と「説明のノダ」等とを同じ枠組みで論じられる、という利点がある。

### 3. 問題解決

#### 3.1. 野田(1997)の問題とその解決

先述のように、野田(1997)は「発見のノダ」を「非関係づけの『のだ』」としているが、その一方で、「関連づけと非関連づけは連続的であり、区別が難しい場合もある」(野田1997:73)と述べ、(20)~(22)をその例として挙げている。

(20) (友人の部屋に本棚が五つあるのを見て、独話で)

「本、たくさん、読んでいるんだ(なあ)」 (同:73 (62))

(21) 「本、たくさん、持っているんだ(なあ)」 (同:73 (63))

(22) 「本棚が五つあるんだ(なあ)」 (同:73 (64))

野田(1997:73)は(20)を「関係づけ」、(22)を「非関係づけ」、(21)を「中間的であり」「区別は難しいが」「一応関係づけとしてあつかう」と述べている。しかし、その根拠については「事態を全くそのまま把握したり提示したりしている」ものだけを「非関係づけ」として扱う、と述べるに留まる。この分類には疑問を感じる。

これは「非関係づけの『のだ』」と「関係づけの『のだ』」とを区別する立場をとるため生じた問題である。野田(1997:71)のいう「関係づけ」とは「Pの事情・意味としてQを把握・提示する」ことであり、PとQとが異なる音形で実現することが前提とされている。QがPと同一音形では「P、Q(=P)ノダ」→「P、Pノダ」というトートロジーとなり「Pの事情・意味」とは理解されないからである。したがって「非関係づけの『のだ』」は「状況をそのままQという語句で把握」したり「先行する語句Qをそのままの形で把握」する場合、以前の認識を再認識したりする場合等に限られることになる(同:86)。ところが現実の言語使用においては、(21)のようにPとQとがかなり類似するが同一ではない場合が存在し、分類の取り扱いに苦慮することになる。

しかし、ノダが提出するのは関連づけの結果導き出された、ある命題態度を伴った話し手の「事態認識に対する解釈」であり、「納得させる」という命題態度で提示されていると考えれば、PとQとが同一音形であってもPは「事態認識」、Qは「事態認識に対する話し手の解釈」であると見なせる。したがって、(21)は(23)、(22)は(24)

のように「関連づけ」という同一の観点から分析することができる。

(23) (21)における関連づけの1例

P: 友人の部屋に本棚が五つあり、本がたくさんあるという事実の知覚

C: 個人が所有している本の量に関する一般的な想定

Q: 友人は自分の想像以上にたくさん本を持っているという解釈

(24) (22)における関連づけの1例

P: 友人の部屋に本棚が五つあるという事実の知覚

C: 個人が所有している本棚の数に関する一般的な想定

Q: 友人は自分の想像以上に5つも本棚を持っているという解釈

### 3.2. 庵他(2000)の問題点とその解決

(25)

関連づけ

先行する状況 ————— 解答

(使い方をしりたい、傘を探しているetc.)

(26)

関連づけ

状況知覚 ————— 先行する状況 (既存文脈) ————— 解答 (解釈)

庵他(2000:274)では「発見のノダ」を(25)のように図示している。同様の道具立てで本稿の考える「発見のノダ」を図示すると、(26)のようになる。両者の相違点は次の通りである。庵他(2000)は関連づけを2者関係で捉え「状況知覚」を独立した段階としては捉えていない。また、「傘を探しているコト」を「先行する状況」と捉える。それに対し、本稿は「状況知覚」を独立した段階として認め、「その場所を一度探したコト」「その場所にはないと考えているコト」「その場所を全く考慮しなかったコト」等を「先行する状況」と考える。つまり、庵他(2000)では「状況知覚」イコール「解答の発見」と捉えているのに対し、本稿は「状況知覚」が「既存文脈」と関連づけられ「解答の発見」がなされると考えるという根本的な相違点が存在する。

庵他(2000)の「事実の知覚」という段階を独立したものとしなないという立場は、(19)で示した話し手の認識過程を忠実に反映しているとは言えない。そのため(27)のような文を分析しようとするとう問題が生じると思われる。

(27) 立春を過ぎても毎日寒い。「暦の上ではもう春なのよ」と教えると、  
「そっか。うちは山の上だから冬なんだね。暦の上に住みたいなあ」

(朝日新聞朝刊2001.3.2)

(27)の「そっか」は「そっか、わかった」であり、「うちが山の上にあるコト」と「今まだ冬であるコト」とが「原因・結果」関係で結びつくことを発見したことを表していると言えよう。この点においては庵他(2000:274)のいう「関連づけの存在を発見したことを表す」という考え方は的を得ている。しかし、庵他(2000)の主張は「ノダが」「関連づけの存在を発見したことを表す」というものである。したがって、波下線部も「解答の発見」、ノダ文もまた「解答の発見」を表していることになる。

一方、ノダが「新たに生じた解釈」を「納得させる」という命題態度で提示すると考えれば、上記ノダ文は「話し手が発見した関連づけの内実(= 解釈)」を言い表わしていると考えることができる。また、(19)で示したように「状況知覚段階」と「解釈段階」とを区別する立場をとれば、事態Pの描写とノダ文が提示するQとが、言語形式上は一致、または類似するものであっても「状況の発見」と「解釈の発見」とに区別することができる。母語話者の直感的判断でも「あった」と知覚し発話することと「こんなところにあったんだ」と解釈し発話することは、明らかに異なる意味を持つと考えられる。本稿の考え方に立てば、その違いを説明することが可能である。

#### 4. 既定性分析の問題解決

##### 4.1. 既定性分析の問題点

野田(1997:80-81)は(28)(29)のように、「突然、予想もしない事態に遭遇したような場合には、現象描写文が用いられる。その事態がすでに定まっていたかどうかなど考える余裕はないので、対事的『のだ』は用いられないのが普通である」と述べている(下線、許容性判断とも原文)が、その一方で(30)のような文は(31)のように「対事的『のだ』」が用いられうると述べている。

(28) あっ、ゴキブリが死んでる。 (同:81 (5))

(29) # あっ、ゴキブリが死んでるんだ。 (同:81 (6))

(30) あ、雨が降ってる。 (同:81 (9))

(31) あ、雨が降ってるんだ。 (同:81 (10))

野田(1997:81)では非ノダ文は「眼前の事態をそのまま述べているが」、ノダ文では「気づく前からすでに『雨が降っている』という事態が存在していたと話手が捉えていることが示される」と述べている。言い換えると、話し手が事態を「既定」と捉えればノダが使われ、「非既定」と捉えればノダは使われないということになる。

野田(1997)が述べるように、もし、(31)が「話し手によって既定と捉えられている」のであれば(29)も「既定と捉えられて」何ら問題ないはずである。なぜ(28)は「突然、予想もしない事態に遭遇したような場合」とのみ捉えられ、(30)は既定とも捉えられうるのか。(28)や(30)も発話時において真偽が確定しているという点において「既定」である。話し手が事態を既定と捉える判断基準が明示されていないため、(28)と(29)、(30)と(31)、(29)と(31)の違いを明確に説明できないと言える。<sup>13</sup>

田野村(1990:28)も「こうした状況では、何か別のことがらを受け、その背後の事情としてその事態を捉えるということは原理的にあり得ない。また、あらかじめ定まっていた実情として捉えるということもあり得ない」と述べ、「突発的に生じた事態や事態の兆候を認識して、直ちにそのことを言語化するような場合には『のだ』は用いられない」と述べている。(例文は田野村1990:28、許容性判断は原文)。

- (32) あれっ、財布が{ない／?ないんだ}。
- (33) しまった。傘を忘れて{来た／?来たんだ}。
- (34) 何てやつらだ。まだ追いかけて{来る／?来るんだ}。
- (35) あっ、{倒れる／?倒れるんだ}。

田野村(1990)にもいくつかの問題点がある。まず、状況によっては(33)(34)はノダが使用可能と考えられる点である。この事実は「背後の事情として事態を捉えること」が「原理的にあり得ない」場合であってもノダが用いられうることを示している。また、「突発的に生じた事態や事態の兆候」という記述にも問題がある。(32)~(34)で言い表わされている事態は発話時以前に生起しているか、または発話時以前から発話時まで継続している事態である。したがって、もしこれらが「突発的」であるなら、それは現実世界においてではなく、話し手の認識という点において「突発的に認知された」ということとしか考えられないが、そうであれば、(31)のようなノダ文が適格であることを説明できなくなる。「雨が降っている」事態を「突発的に」「認識して」「直ちに」言語化している状況で発話されうるノダ文と言えるからである。

#### 4.2. 「発見のノダ」の使用条件

- (36) 「発見のノダ」使用条件：ある状況を知覚し、その事態認識と文脈とを関連づけることによって導き出された「新たに文脈に登録されるべき解釈」や文脈を却下した「意外性を持つ解釈」を、自己の思考体系に定着させるべく自らを「納得させる」という命題態度で発話する際にノダが使用される。

「発見のノダ」の使用条件を(36)のように考えれば、(37)と(38)の許容性の違いを説明できる。一般的に、我々は雨より好天の日の方が多いことを経験的に知っている。そのため、(37)の状況はある事態として描写されることはあっても、通常「意外なこと」として解釈されることはない。そのため、ノダを用いると許容度が低下する。一方(38)では、たとえば「予想に反して晴れている」という「意外性を持つ解釈」が容易に導き出されうるため、問題なくノダが使用できるものと考えられる。

(37) (朝、外を見て) ?? あっ、晴れているんだ。

(38) (雨という天気予報聞いた翌朝外を見て) あっ、晴れているんだ。

ノダが用いられない場合についても、(36)の観点から以下の3通りの説明が可能である。まず、①解釈の対象となる事態認識を形成する段階での発話の場合、である。

(39) あれっ、財布がない。/? あれっ、財布がないんだ。

(40) A: (友人がそわそわとしているのを見て) どうしたの?

B: 財布がないんだ。

(39)は2.2で述べた「状況知覚段階」での発話である。田野村(1990)の述べているように「背後の事情としてその事態を捉える」または「あらかじめ定まっていた実情として捉える」ということが不可能だからではなく、そもそも、「捉える」対象となる事態認識を確定する段階での発話であり、関連づけは行われておらず、解釈も存在しないためノダは用いられない。一見(40)のようにノダを用いることもできると思われるが、これは「状況知覚段階」における発話ではなく「既定解釈段階」の発話である点注意が必要である。次は②事態認識から解釈へと進まない場合、である。

(41) # あっ、ゴキブリが死んでるんだ。 (= (29))

(42) (道路脇に黄金虫がいたらと思ったらゴキブリの死骸だった)  
あっ、ゴキブリが死んでるんだ。

本稿の考え方が正しければ、(42)のように、「ゴキブリが死んでいる」という事態認識から「文脈を却下」する「意外性を持つ解釈」が導き出された場合であれば、「ゴキブリが死んでいるんだ」という文が許容されることになる。ところが、興味深いことに(43)のような状況ではノダは非常に用いにくい。この問題は(30)(31)のようなノダの使用が任意的であるかに見える場合におけるノダの選択基準とも関わってくる。ノダの使用・不使用は何によって決まるのかという問題である。

(43) (台所で) あっ、ゴキブリが死んでる / # 死んでるんだ。

その答えは「ある事態が話し手にとってどのような形で関連性を持つか」である。ある事態がそれだけで話し手にとって十分な意味を持つものである場合、人はそれ以上の解釈を行わない。(43)は「ゴキブリが死んでいる」という事実認識そのものが話し手に大きな衝撃を与える場合である。よって、更なる労力を費やして事態認識を更に解釈することはない。それよりもゴキブリを片付ける行動に出るであろう。一方、(43)は「ゴキブリが死んでいる」という事態認識から「(黄金虫だと思ったら / こんなところに…) ゴキブリが死んでいる」等の「意外性を持つ解釈」を導き出し、その解釈が事態認識よりも大きな意味を持つ場合に行われる発話であると考えられる。<sup>14</sup>

(44) (自分の車を見て) あ、パンクしている。 / # あ、パンクしているんだ。

(45) (他人の車を見て) あ、パンクしている。 / あ、パンクしているんだ。

(44)(45)も同様である。(44)は「話し手の車」であり事態認識の時点で十分な関連性を持つが、(45)は「他人の車」であり、パンクはそう頻繁に起こることでもないため、「意外性を持つ解釈」としても関連性を持ちうる例である。ノダが用いられるか否かは先行研究の述べているような「既定か否か」によるのではないと言えよう。

## 5. まとめ

(36)で示した通り、「発見のノダ」が提示するのは「事態認識に対する解釈」であ

る。当然その解釈は、確定された段階で話し手にとって既定性を有することとなる。つまり「発見のノダ」の使用条件とされてきた「既定性」はノダが解釈を提示することから必然的（かつ派生的）に生じる特徴であり、本質的な使用条件ではない（事態自体が既定であるコトとは別問題である）。これをノダ文全般に当てはめて考えると、先行研究によって提唱されている「既定命題を提示する」という特徴は、ノダの本質とするには問題があるということになる。また、ノダが関連のある「事態」を提示するという論考も「解釈の提示」という観点から捉え直されるべきであろう。

注

- 1 「発見」という名称は古田(1988)で用いられているものである。本稿は「発見」はノダの特徴ではなく、むしろ「登録」とでも言うべきであると考えているが、便宜上この名称を用いることとする。
- 2 庵他(2000:271)でも「『のだ』文は状況に対する話し手の解釈を表します」と述べ、ノダが話し手の解釈を表すことが指摘されている。例えば次の(a)のような文である。

(a) (朝起きて道路がぬれているのを見て) ゆうべ、雨が降ったんだ。 (同:271)

庵他(2000)でいう「解釈」とはその例文から判断すると、「状況から推論すること」を意味するものと思われる。しかし、解釈を提示するだけであれば、ノダは必須ではない。

(b) (朝起きてごみを出しに行ったら全然出されていないのを見て) もう、ごみを集めていった。

(a)と(b)とを比べると「状況に対する話し手の解釈」という点では違いはないと思われるが、(b)ではノダを川いなくてもよい。つまり「解釈」という観点だけではノダ文を完全には記述できないということである。しかし、ノダは単に「話し手の解釈を表す」ものではなく、「事態認識や先行発話を解釈し」、何らかの「命題態度(後述)」でもって提示するものであると考えれば、(a)は「提示されているのが単なる状況に対する話し手の解釈だけではない」ことを表していると説明することができる。また、庵他(2000)はこの解釈用法を「理由」「言い換え」「発見」と同列に扱っている点も本稿とは考えが異なる点である。なお本稿は論考の基本的な方向において(いくつかの点で異なる立場・考えをとるものの)ノダを「解釈的用法のマーカである」とする内田(1998)に影響を受けている。その差違を述べることは本稿の目的とするところではないので、機会を改めたい。
- 3 野田(1997)ではノダを「スコープの『のだ』」と「ムードの『のだ』」に二分し、後者を更に聞き手を必要としない「対事的」に用いられるものと、聞き手を必要とする「対人的」に用いられるものとに区別する。そしてそれぞれを「関係づけの『のだ』」と「非関係づけの『のだ』」とに下位分類する。「関係づけの『のだ』」とは「QをP(状況や先行文脈。言語化されるとは限らない)と関係づけて把握、提示するために用いられているもの」、非関係づけの『のだ』とは「Qを既定の事態として把握、提示するために用いられる」(同:71-72)とされる。
- 4 寺村(1984)等で論じられている、いわゆる「夕のムード的用法」である。
- 5 前者の定義を後者の定義に代入すると「ある発話がそれを取り巻く状況と関連があることを示すということの存在を発見したことを表す」となり、諸定義の不整合性が表面化することも問題点である。
- 6 関連性理論では「文脈(context)」を「心理的な構成概念(psychological construct)で、世界についての聞き手の想定の部分集合をなす」(Sperber & Wilson 1995:18, 引用邦訳)と考え「その場の物理的環境やすぐ直前の発話に限らない」という立場をとる。本稿もこの考えに従う。
- 7 「文脈効果」とは「ある文脈を改変し改善する」(同:130)という効果である。簡単な例を挙げる。

[文脈含意(文脈に依存した新しい含意)] P:雨が降っている→C:雨が降ればキャンプは中止だ  
→Q:今日のキャンプは中止だ。

[強化] P:雨が降っている。→C:雨だろう。→Q:やっぱり雨が降っていた。

[却下] P:晴れている。→C:今日は雨だろう。→Q:雨ではなかった。
- 8 この区別は三尾(1948)の「現象文と判断文」、仁田(1986)の「現象描写文と判断文」の区別に通じるところがあるが、「判断文」という類型が「題目-解説」という「文の内部構造」に着目した

- 区別であるのに対し、解釈的用法は「文の表示対象」に着目した区別であるという違いがある。なお本稿では「今日は暑い」や「彼は明日行くだろう」のような「題目-解説」構造にある判断文も「話し手の判断（思考）」をそのまま描写している場合「描写的用法」に分類されると見なす。関連性理論で言う「解釈的用法」は「他の表示に対する表示を行う」場合を指すと考えられるからである。また、事態に対する話し手の解釈を表示する文まで解釈的用法に含めるとすれば、全ての発話が解釈的用法となり、描写的用法との区別がなくなってしまうという問題点も存在する。
- 9 この文については、査読者から「判断することは『解釈』であり」「解釈的用法である」とのコメントをいただいた。しかし注8で述べたように、本稿ではある題目に関する「話し手の判断」をそのまま字義通りの言語形式で表示する文は「描写的用法」に属すると考える立場をとる。
- 10 例えば「はっきり言って」等のいわゆる発話行為の副詞で表されるものがそうである。仁田(1986:67)では「『正直言ッテ』は、言表事態の外側に存する発言のムードに関わる表現である」と述べ、事態描写や事態判断には関わらないという考えを採っている。
- 11 名古屋大学言語文化学部教授大曾美恵子氏の指摘を参考にした。なお、「こんな・そんな」等がノダと共に起る傾向があるが、ノダで提示される命題態度は「評価」に限らない。また、全ての命題態度が言語形式によって符号化されることも限らない。ノダ文が多様な理解を受ける所以である。
- 12 佐治(1991)においてもノダを「らしい」等と同レベルで捉え、「前の述語の判断を確かなものとして認定する表現である」と述べられているが、「発見のノダ」においては後接できないという点は指摘されていない。他の用法においては「らしい」等にノダが後接できることから見ても、「らしい」等と同レベルで機能するのは「発見のノダ」の場合に限ってと考えた方がよく、ノダが「らしい」等と同レベルにあることをノダの本質的な特徴として扱うことは問題があると考えられる。
- 13 野田(1997:65-66)は「『既定の事態として捉える』というのは話し手の捉え方であり、『Qが実際にすでに成立している』ということと同一ではない」と述べるに留め、「既定」という概念を厳密に規定せず、「『既定』という概念は微妙なので、『のだ』の性質の記述には必要であっても、本質とするには問題がある」と述べている。にも関わらず、「非関係づけ」のノダの記述に関しては、「既定」という概念をかなり本質的なものとして用いている点に根本的な問題があろう。
- 14 ただ、関連性の大きさは個人の程度問題である。ゴキブリには全く動じず不潔だと思わない人なら(43)でもノダを使用する可能性（社会通念上、その可能性はかなり低いと思われるが）がある。

#### 参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘. 2000. 松岡弘監修『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：スリーエーネットワーク.
- 内田聖二. 1998. 「『(の)だ』-関連性理論からの視点-」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会編『小西友七先生傘寿記念論文集 現代英語の語法と文法』. 243-251. 東京：大修館書店.
- 佐治圭三. 1991. 『日本語文法の研究』東京：ひつじ書房.
- 田野村忠温. 1990. 『現代日本語の文法Ⅰ』大阪：和泉書院.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京：くろしお出版.
- 仁田義雄. 1986. 「現象描写文をめぐる」『日本語学』(5-2).56-69. 東京：明治書院.
- 野田春美. 1997. 『(の)だの機能』東京：くろしお出版.
- 三尾砂. 1948. 『国語法文章論』東京：三省堂.
- 吉田茂晃. 1988. 「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15.46-55. 兵庫：神戸大学文学部国語国文学会.
- Blakemore, Diane. 1992. *Understanding Utterances an introduction to pragmatics*. Oxford: Blackwell. (武内道子・山崎英一訳. 1994. 『ひとは発話をどう理解するか』東京：ひつじ書房).
- Sperber, Dan & Deirdre Wilson. 1995. *Relevance: communication and cognition*. Oxford: Blackwell. (内田聖二他訳. 1999. 『関連性理論』第2版. 東京：研究社出版).
- Wilson, Deirdre & Dan Sperber. 1988. "Representation and relevance." In Ruth M, Kempson ed. *Mental representations: the interface between language and reality*. 133-153. Cambridge: Cambridge University Press.